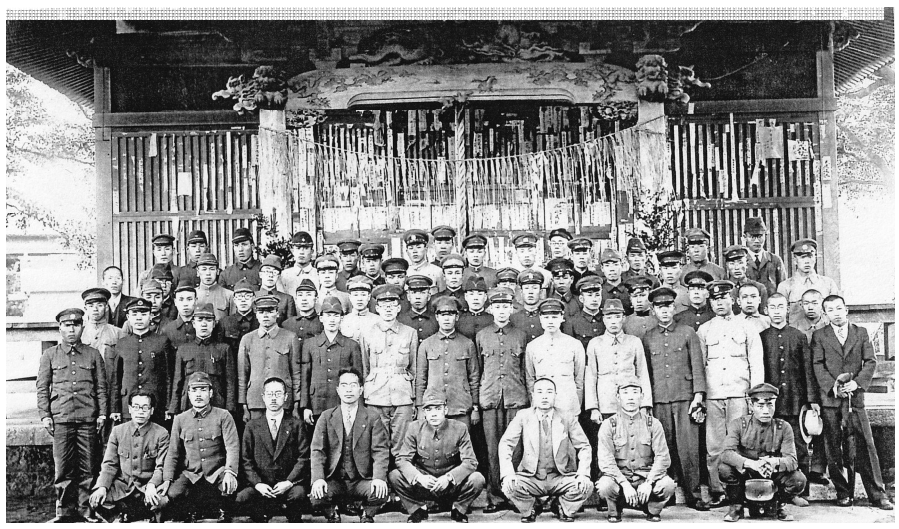
3. 陸軍へ入隊



戦前の覚翁寺本堂
数金さんの壮行会開催場所。銘水として知られたここの井戸水を毎日山頂まで天秤棒で運んでいましたが、バケツ半分にするのが道中で水をこぼさない秘訣だったとのこと。



大原小学校で徴兵検査（兵役前の身体検査）を受けた帰路、付近の神社で撮影された勝浦町関係者（昭和 17～20 年頃）。2 列目以後は受検者。引率者達と思われる最前列右から 3 人目、背広姿の人物が兵事係の吉野貴氏（故人）。　提供：吉野 稔　様





戦前の上野駅
昭和 7 年完成の新駅舎。ここから数金さんの軍隊生活がスタートしました。

突然のことでした。昭和１９年秋、数金さんに召集令状が届きます。半年前の法律改正で２０歳から１９歳に徴兵年齢が繰り下りましたが、自分の番はまだ先と思っていたところへ玄関で赤い令状を手渡され、とても驚いたそうです。防空監視哨の仲間たちが開催してくれた壮行会で、「数金！元気で行って来いよ！」と別れを惜しみつつ見送られた数金さんは、新宿の親戚宅に１泊し、９月２日の夜、集合指定場所の上野駅に赴きました。各地へ向かう多くの招集兵で混雑する駅構内で点呼整列していた数金さんが、ふと目を周囲にやると、入隊準備でお世話になった勝浦町役場の兵事係、吉野貴さん(後の 2 代目勝浦市長、故人)が、こちらを見通せる高台にいることに気が付きました。大勢の点呼確認には長時間を要しましたが、その間、吉野さんはずっと見送っていてくれたそうです。これから始まる軍隊生活への不安の中、大変心強かったそうですが、御礼をしようにも勝手に整列から抜け出ることも出来ないまま発車時刻を迎えた数金さんは、終戦後、新鮮なブリを片手に吉野さん宅を訪問したのでした。

列車で最初の任地、仙台に到着した数金さんですが、宿舎に入ったものの何の訓練もなく２～３日おきに様々な予防注射を打たれるので、何となく南方の戦線に行くのかなぁと思ったそうです(※実際、数金さんが当初配属予定の船舶工兵第１３連隊はインドネシア方面に所在していました)。やがて、部隊は仙台を出発することとなりましたが、その際、周囲から「お前らはきっと輸送船が潜水艦にやられて死ぬぞ」と言われたこともあり、いよいよ南方戦線と思った数金さんでしたが、列車は西へと進み続け、結局は後述のように広島県の船舶部隊に転属となります。今にして思えば、長男だったから内地に残してくれたのかな？とも思うそうですが、後述する「マルレ艇」製造のため、漁師で船舶に詳しい数金さんに白羽の矢が立ったのかもしれません。列車移動中はカーテンを下すよう指示があったそうですが、仙台や乗り換えの姫路駅では付近の住民が「バンザイ！バンザイ！」と大勢が列車を見送ってくれたので、感動のあまり涙が出たそうです。